

ポスター | 1-18 川崎病・冠動脈・血管

ポスター

川崎病・冠動脈・血管①

座長:小林 徹(国立成育医療研究センター臨床研究開発センター)

Thu. Jul 16, 2015 5:20 PM - 5:56 PM ポスター会場 (1F オリオン A+B)

I-P-120~I-P-125

所属正式名称:小林徹(国立成育医療研究センター臨床研究開発センター 臨床研究企画室)

[I-P-124]川崎病急性期における IVIG施行前後の血清 IgG値と治療効果の検討

○岡部 真子, 渡辺 一洋, 橋本 郁夫(富山市民病院 小児科)

Keywords:免疫グロブリン大量療法, 血清IgG値, 川崎病急性期

【背景】川崎病急性期治療としての免疫グロブリン大量療法 (IVIG) の有効性は用量依存性が指摘されており、血清 IgG値と治療の反応性が注目されてきた。IVIG前後における血清 IgG値の上昇不良を予後不良の指標とする報告もあるが、一定の見解は得られていない。【目的】川崎病急性期の初回 IVIGにおける血清 IgG値の変化と治療反応性の関係を検討した。【方法】2008年2月から2014年10月まで当科に入院した76例の川崎病について検討した。川崎病急性期治療のガイドラインに従い初期治療は IVIG 2g/kgを用いた。IVIG施行前後の血清 IgG値の差から変化量を求めた。【結果】IVIG反応例56例 (IVIG反応群)、不応例20例 (IVIG不応群)であり両群に年齢的な有意差はなかった。初回投与前の IgG値は年齢とともに増加していた。IVIG後の IgG値は投与前の値に依存し増加を認め平均は 2744 ± 410 mg/dlであった。IgGの上昇量は平均 2050 ± 372 mg/dlで体格や年齢に依存せず一定の値を示した。IVIG施行後の血清 IgG値、IgG上昇量とも両群間で有意差は認めなかった。【考察】過去の報告では IVIG後の IgGの変化が IVIG不応の予測因子となるとの意見があった。しかし今回のように IVIG後の IgG値が一定値を超えていた場合の検討においては、IVIG反応群と不応群間では IVIG投与後の血清 IgG値および上昇量の差を認めなかった。IVIG後の IgG値が一定値を超えていた場合は、IgGの上昇変化に関わらず治療効果がある可能性が考えられた。IVIG施行前に反応群であることが予測されれば、初回 IVIG後の目標 IgG値を設定し、IVIG施行前の IgG値から IVIGの投与量を決定することで、IVIGの投与量を最小限にし、副作用やリスクを減少させることも今後の治療選択肢の1つと成り得るのではないかと考えた。【結語】IVIG後の IgG値が一定値以上を示す場合においては、IgGの上昇変化は治療反応性に明らかな影響を与えない可能性が考えられた。